

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

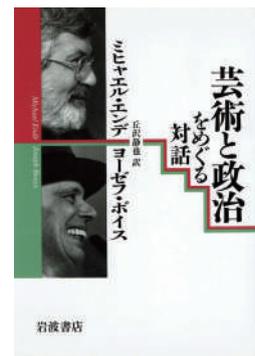
Recommended books for art students.

クリエイティブイノベーション学科

石川卓磨准教授

『芸術と政治をめぐる対話』

ミヒャエル・エンデ, ヨーゼフ・ボイス [著],
丘沢静也 訳, 岩波書店, 1992



『モモ』や『ネバーエンディング・ストーリー』などで知られる、ドイツを代表する児童文学作家ミヒャエル・エンデと、「拡張された芸術概念」や「社会彫刻」といった思想を推し進め、戦後ドイツで最も大きな影響力を持った現代美術家ヨーゼフ・ボイス。この二人の対話が本書では収録されています。芸術と社会に対して鋭い思想と洞察を持った両者が、時に意見をぶつけ合いながら、苛烈とも言える議論を展開しています。その熱量とライブ感は、本書から強く伝わってきます。

1985年に交わされたこの対話は、現代における社会と芸術の関係を考える上でも、示唆に富んでいます。むしろ今こそ読まれるべき一冊と言えるでしょう。当時はトリッキーなパフォーマンスとして受け止められていたボイスの思想は、実は今日の状況を的確に言い当てていたように思えるからです。

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

クリエイティブイノベーション学科

石川卓磨准教授

『文化がヒトを進化させた： 人類の繁栄と〈文化 - 遺伝子革命〉』

ジョセフ・ヘンリック 著，

今西康子 訳，白揚社，2019



進化論は生物学の領域に属するものであり、文化や芸術とは無関係だと思われがちですが、決してそうではありません。特にヒトの進化を考える際には、生物学的な観点だけでは理解しきれないことが多くあります。

たとえば、なぜ私たちは辛い食べ物をおいしいと感じるのでしょうか。なぜ、非常に幼い子どもでさえ、間違いや逸脱を見つけると、それを指摘し、相手に考えや行為の修正を促そうとするのでしょうか。

さらに言えば、私たちの進化はすでに完成し、変化を止めているわけではありません。高度情報化社会の進展や AI、デジタル技術の浸透に伴って、私たちの認識や行為、そして身体そのものも、今なお進化（あるいは退化）を続けているのです。私たちがこれまで自明なこととして深く考えずにきた事柄を、改めて考えさせ、進化の意味を教えてくれる一冊です。

ムサビの教員が選ぶ

美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

クリエイティブイノベーション学科

石川卓磨准教授

『哲学入門（ちくま学芸文庫）』

バートランド・ラッセル 著，
高村夏輝 訳，筑摩書房，2005



「哲学入門」という邦題がつけられていますが、原題は『The Problems of Philosophy（哲学の諸問題）』です。本書では、哲学の中でも特に認識論に焦点が当てられています。

この本を読んで印象的だったのは、対象を観察して絵画や彫刻を制作することや、椅子やテーブルについて深く考え、それをデザインする行為が、ラッセルが説明するような哲学的な理解とつながっているのだということでした。

読書は一見、特別で知的な営みに思えるかもしれませんが、美術大学で身体を使い、思考を重ねて制作に取り組むこともまた、世界や社会を考えることと深く結びついています。

そのことを理解するうえで、本書の読書体験はとても有益だと思います。ぜひ手に取ってみてください。